

ナチュラルキス +_{plus} 3

side Keishi

C o n t e n t s

ナチュラルキス^{plus}3 5
～ side Keishi ～

揺れる思い 265

ナチュラルキス_{plus} 3

～ side Keishi ～

1 気まずさからの遁走

うん……朝……か……

まだぼうつとしている頭を軽く振りながら、佐原啓史はゆつくりと臉を開いた。

今日は……

そうだ……俺の家に行くんだ……沙帆子を連れて……

そう考えたことで、意識がはつきりする。

時刻を確認してみると、まだ充分余裕があった。

啓史はふつと息を吐いて、もう一度枕に頭をつける。

結婚式を挙げる教会を見に行った昨日も朝から緊張しっぱなしだったが、今日も同様に……いや、この緊張は、ずっと抱え続けているもの。バレンタインデーの日、教え子である榎原沙帆子との結婚話が持ち上がったから、ずっと……

今日だって、いったいどんなことになるのか……

啓史の実家に沙帆子を連れていき、家族に結婚することを伝えなくてはいけないが、すんなり賛成してもらえるなんてことは、まずないだろう。

必要なことを伝えたら、なるべく早く引き上げるとしよう。仮に採めたとしても、できるだけ沙帆子を巻き込まないようにしたい。

両親とじっくり話をして、なんとしても結婚を認めてもらう。説得が無理だったら、もう強硬に進めるしかない。

沙帆子が結婚を嫌がらない限り、他にどんな問題があってもなき払うつもりだ。

「はあ……」

思わず大きなため息が出た。

問題は、あいつの気持ちだけなんだよな……。俺に不安を抱かせるのは沙帆子だけ……

いまの啓史の敵は、皮肉なことに、愛する沙帆子自身なのだ。

暗い気分に分かれていて自分に気づき、啓史は皮肉な笑みを浮かべた。

やめよう……どれだけ考えたところで、危うい状況は変わらない。

彼女が戸惑っている間に、とことん付け込んでやる。そして、結婚することを受け入れさせてしまえばいいのだ。可能な限りふたりで過ごし、触れ合っていく。

己の性格に、少々どころでなく不安を感じるが……沙帆子に好意を持ってもらえるようなふるまいを、なるべく心がけるとしよう。

「よしっ」

決意を固めた啓史は、ベッドから出て支度を始めた。

着替えをし、軽く朝食を食べた彼は、伯父の橋広勝に電話をかけようと携帯を開く。

今日のうちに伯父夫婦のところに結婚式の招待状を渡しに行くつもりである。あと、親友の飯沢敦にも。

伯母の麗子が沙帆子に会いたがっているから、実家の帰りに彼女を連れていこう。それに、部活の顧問として学校に行っている兄の徹が戻ってくる前に、実家を出たい。伯父のところに行く予定を入れておけば、家を出る口実になる。

電話に出たのは、伯母の麗子だった。

「伯母さん、おはよう」

「あら、啓史さん。もしかして、今日来てくれるの？」

期待に弾んだ声に、啓史は苦笑した。

沙帆子とキスしているところを伯父の広勝に目撃された日の夜、その話を聞いた伯母から電話をもらった。それで、お相手のお嬢さんに早く会わせてね、と言われていたのだ。

「行くよ。夕方……遅い時間になるかもしれないけど……」

「まあ、そう。楽しみだわ。夕方なら、夕食を食べていってくれるわね？」

夕食か……

「あいつがなんて言うかな……」

「絶対食べていってよ。お願い、啓史さん」

懇願されてしまい、断れそうもない。

沙帆子にしてみれば、自分にさんざんひどい言葉を浴びせた広勝を前にして食事をするなんて嫌

に決まって……いや、だったらなおさら顔を合わせて親しくなってもらう機会をつくるべきか……なんにしても、伯母とは早めに会わせたい。麗子はすでに沙帆子が高校生であることも知っているし、きつと彼女を無条件で受け入れてくれるに違いない。沙帆子も、そうやって自分を認めてくれる存在がいることを知れば、心強いだろうし嬉しいんじゃないだろうか？

「それじゃ、ご馳走になることにするよ」

「まあっ、ありがと。そう言ってくれると思ってたわ」

「じゃあ、夕方……そうだな、五時くらいには行けるようにする」

「ええ、待ってるわね。沙帆子さん、とっても可愛いお嬢さんなんですってね。もうっ、高校生だなんて……啓史さん、ほんとやるじゃないの」

笑いの混じった声に、啓史は顔を歪めた。

「伯母さんー」

「はいはい。照れないの」

軽くあしらわれ、啓史は苦笑いを浮かべた。まったく、この伯母には敵わない。

榎原家の玄関先で彼を迎えてくれたのは、沙帆子の母、芙美子だった。

「おはようございます」

「啓史君、おはよう。時間ぴったりね」

啓史は芙美子に向けて頷くと、芙美子のすぐ後ろに立っている幸弘と視線を合わせ、少し深めに

頭を下げた。幸弘は敵めしい顔で何か言いたそうに見つめてくる。

昨日は式場の下見に行き、予約を入れた。「お願いします」と、牧師に告げた瞬間、啓史の中で、沙帆子との結婚が現実味を帯びた。もうこれで、何もかもうまくいきそうに思えて……

だが、そのあと、幸弘から強烈な敵意を向けられたのだ。けれど、そのおかげで冷静さを取り戻し、なおかつ闘争心も燃え立たせられた。

あのとときの敵意は、結婚に向けてこの先を見据えなければならぬ啓史にとって、ありがたいものだった。幸弘には感謝したいくらいだ。

式の打ち合わせもした。新郎用の式服もレンタルし、沙帆子のウエディングドレスも購入した。着々と準備が進んでいるが……このまま、彼の願うとおりに結婚式を挙げられるかはわからない。あまり考えたくないが、駄目になる確率が高い。

幸弘が何か言い出すかと思えば待ったが結局口を開かなかつたので、啓史は自分の用事を切り出した。

「実は、今日、伯父の家に招待状を渡しに行こうと思つて電話をしたら、沙帆子さんと一緒に夕食に招かれて……帰りが少し遅くなりますが、構いませんか？」

「ええ、もちろんいいわよ」

「あの、沙帆子さんは？」

「いま自分の部屋よ。ちよつと待つてね」

芙美子はそう言うと、沙帆子の部屋のドアを開け、頭だけ中に突っ込んだ。

そのタイミングを待つていたかのように、幸弘はぐつと前に踏み出し、不機嫌な顔を寄せてくる。

「沙帆子に、嫌な思いをさせるなよ」

敵意むき出しの声で幸弘が囁いた。

「嫌な思い？」

「ああ、それと、お前の両親が、結婚に反対するようなら、この話は白紙に戻すからな」

幸弘は後方を気にしながらも脅すように言う。

「親の気持ちに左右されるつもりはありません」

啓史は小声ながら、強い口調で返した。

「親に反対されたら終わりだ！」

一步も譲る気はないとばかりに、幸弘は言い放つ。

ドア近くに佇んでいる芙美子にも二人の会話は届いているだろうに、何も言わなかった。

沙帆子が部屋から出てきた。

彼女を見た瞬間、啓史の息が止まる。

学園祭の劇で、舞台上に立つていた、あのとときの彼女に近い……

さほど濃い化粧ではないが、いつもの沙帆子とはあまりにも雰囲気がかげ離れている。

その大人びた表情は、清楚でありながら、啓史に妖しい色香を感じさせた。

「あの……」

沙帆子は恥ずかしそうに啓史を見上げ、口を開く。

赤みを帯びた唇に、胸のあたりがぞわぞわした。

そのとき、啓史は、自分に向けられている幸弘の鋭い視線に気づいた。

自分がいま感じていることが、すべて見抜かれているように思えて、いたたまれない気分になる。

「きよ、今日は……よろ、よろ……し」

つつかえながら言葉を口にしてしている沙帆子の手首を、啓史はぐっと掴んだ。

「へっ？」

「行こう」

彼女を急かし、自分のほうへと引つ張る。

「あ、は、はい」

沙帆子はいくぶん戸惑いを見せながら、靴に足を差し入れた。

「さ、沙帆子！」

切羽詰まった声で呼ばれ、ひどく驚いた様子で父親を振り返る。

「パパ、何？」

幸弘は娘に向けて手を伸ばしかけたが、自分に向けられている妻の目に気まぎれになったのか、そのまま下ろした。

沙帆子は父の様子に、戸惑いを見せている。

「パパ、どうしたの？」

「いや……」

沙帆子を見つめた幸弘は、くしゃつと顔を歪ませた。

「子どもでよくないか？」

沙帆子から目を逸らすように俯いた幸弘は、虚しさで切望の混じった声で呟く。

父の思いがわからないのか、沙帆子は不可解そうな表情をしている。

幸弘は、大人びた沙帆子の顔をもう一度見つめ、妻に不満げな視線を向けた。

「芙美子ちゃん、僕の可愛い娘はどこに行っちゃったんだよお？」

「はいはい」

軽く返事をしながら芙美子は幸弘の肩を抱いてやわらかく叩き、ふたりに顔を向ける。

「情けないパパのことはいいから、あなたたち、さっさと行っちゃってちょうだい」

芙美子は沙帆子と啓史を追い払うかのように、しつしと手を振る。

この場を明るくしようという、芙美子の思いやりを強く感じた。彼はそれに応えるべきだろう。

「芙美子ちゃん。悲しんでる僕に、そういう言い方、ないんじゃないかなあ」

啓史は幸弘の言葉を耳にしながら、両親を見ている沙帆子の手を引つ張った。

我に返った彼女が靴を履き終えたのを確認し、玄関の外へと促す。

「いってきます」

「ふ、芙美子ちゃん……いい、いってきますだつて……」

幸弘の寂しげな声がなんともいえず耳に残った。

玄関が閉じた瞬間、啓史はほっと息をついた。

結婚相手の父親というのは、どこもあんなやつかいな存在なのだろうか？

啓史に対する幸弘の敵意が消える日が、果たしてくるのだろうか？

幸弘から逃れられて肩の力を抜いた啓史は、改めて沙帆子を見つめた。

綺麗だ……

ぞくりとするほど美しい……

啓史は、その美しさに誘われるまま顔を寄せていったが、ふたりの唇が触れる寸前で、沙帆子の唇を彩っている口紅に気づき、ためらった。

唇を味わいたいのに……

不服に思いながら、唇を掠めるようにして頬に唇を押し当てる。

「あ、あ……せ、先生……」

なまめかしさの含まれた沙帆子の声に、啓史は自分が我を忘れて彼女の首筋に唇を這わせていることに気づいた。

さすがに玄関先で……これはまずい……

なんとか理性を取り戻し、啓史は沙帆子を見つめた。

昨年の学園祭で見た沙帆子だ。あの彼女を、いま、この手にしている。

満ち足りた気分にいる自分を、啓史は皮肉げに笑った。

満足している場合か、まだ手に入れられたわけじゃないぞ。

自分を諷め、沙帆子を見ると、なにやら文句を言いたそうな表情をしている。いましがたの、やりすぎた行為のせいに違いない。啓史は内心にやつきながら、これからのことに意識を向けた。

「今日は、俺のことは啓史と名で呼べよ」

「は？ ……け、啓史？」

たいしたことを言っただけでもないのに、沙帆子ときたら素つ頓狂な声を上げる。

「ああ」

もうすぐ結婚しようという男女なのだから、互いの名を呼び合うのが自然だろう。まかり間違っても、先生などとは呼ばせられない。

「む、無理です！」

沙帆子はとんでもないというように首を振り、強く拒否する。

啓史はむっとした。たったいま口にしたくせに、何が無理だというのだ。

「いま呼んだろ」

そう指摘すると、困ったような顔になる。

突然名で呼べというのは、さすがに無理だろうか？

「まあ、佐原でもいい。ただし、先生とは呼ぶなよ。おかしなことになる」

かなり歩み寄ってやったというのに、沙帆子はまだ顔を引きつらせている。

「む、難しい……課題で……」

顔は情けなさそうだが、受け入れる気持ちにはなったようだ。意識さえしていれば、なんとかや

れるだろう。もし彼女が先生と呼びそうになったら、自分が止めるとしよう。

「俺は、呼び捨てにするから」

啓史の言葉を聞いた沙帆子は、しばらく何やら考え込んだあと、おもむろに口を開く。

「あ、あの。佐原先生、少し練習させてもらっていいですか？」

「はあ？」

啓史は目を眇めて沙帆子を見た。

「練習？」

「な、慣れておいたほうがいいかなあ〜って……」

「こういうのって、練習とかするもんじゃないだろう？」

「そんなこと言わずに、呼んでみてください。お願いします。慣れる努力しますから」

「呼べ？ ……いま呼べってのか？」

「はい。お願いします」

沙帆子ときたら、深々と頭を下げる。

名前を呼ぶ練習なんて、そんな真似、誰ができるかってんだ！

「嫌だ」

啓史は切り捨てるように答えた。

沙帆子は戸惑った顔を向けてくる。

「え。ど、どうして？」

「どうしてだと？」

「それじゃ、お前、俺の名前呼んでみる！」

表情を強張らせて「えっ……」と叫び、沙帆子は必死に首を振る。

こいつ、自分だつてできないことを、俺に無理強いしようとしたのか……

啓史は冷たい目で沙帆子を見据えた。

彼の視線を食らった沙帆子は、怯えたように首を縮める。

「慣れたいって言ったのはお前だぞ。俺は必要に応じて呼べるんだからな」

「せ、先生はそうかもしれないけど……わたし、呼ぶのもだけど、呼ばれるのにも慣れたいんです」

「はあ？」

「だから、呼んでみてください。お願いします。できれば十回くらい連続で……」

勝手な言い草に、啓史は反射的に沙帆子の額めがけて拳を放った。もちろん本気じゃない。

沙帆子が慌てて両手で額を押さえたので、啓史はその上から軽く小突いてやる。

「馬鹿か、お前」

「なんで馬鹿なんですかあ？ 名前で呼んでみてくださいって言うだけじゃないですか。それ

で怒るなんて、先生、意味わかんないですよお」

「お前、自分のこと棚に上げやがって」

「わ、わたし？」

戸惑ったように聞き返してくる。

勝手なことをほざいておいて、まったく自覚がないとは呆れる。
いまの沙帆子が化粧で大人びて見えるせいか、やけにムカつく。

「なら、俺の名前、呼んでみるよ。十回連続で」

沙帆子はぶるぶると必死で首を振る。

「おまえな、名前を呼ぶだけだぞ。簡単なことじゃないか」

「わ、わたしには簡単じゃないって言ってるんです。だからまずは呼ばれるほうを練習させてほしいってお願いしてるのに……先生、わかかんないひとですわねえ」

埒が明かない口論と「わかかんないひとですわねえ」という失礼極まりない台詞に、理性がぶちぎれた。

啓史は考えるより先に沙帆子の口の中に指を突っ込み、憤りに任せて両側にひっぱっていた。

「あっ、ががっ……」

生意気を言う弟に、よくやっていたいたぶりだ。

今は弟の順平と関わる機会も少ないので、ひさしぶりの感触だった。

「さはへんへい……いはい、いはいへふ」

化粧をして綺麗な大人の女性に変身している沙帆子をいたぶっていることに、危うい喜びを感じる。涙目になっているのを見ると、もともっといたぶってやりたい。

「この野郎。いま、どの口が言った？ この俺に対して、おごった口ききやがって」

「ほ、ほへって、ひほくないへふかあ」

「あんたたち……」

突然の呼びかけに、啓史はぎくりとして身を竦ませた。ぎくしゃくとした動きで声のしたほうに顔を向ける。

榎原家の玄関のドアが開いていた。

芙美子と視線を合わせた状態で固まっていると、今度は幸弘までが現れる。

さ、最悪だ……

「まだいたのか？」

そう口にしつつ啓史と沙帆子を見た幸弘が、目を丸くする。

「気まずい……どういえばいいのかわからないほど、気まずい……」

「これは……その……」

沙帆子の両親の視線を、気持ちの上だけでも避けながら、啓史は沙帆子の口からゆっくりと指を引き抜いた。

「つまり……ちよつとした打ち合わせを……」

この状況からなんとか逃れようと、思わず言い訳のような言葉を零してしまふ。

「打ち合わせって？」

「打ち合わせだ？」

芙美子と幸弘から、怪訝さたつぷりのハモリを食らい、啓史は口にしてしまった言葉を凄まじく悔いた。

消えてなくなりたいと思ったのは初めてだ。

こうなりや、もう逃げるしかない。

「い、行くぞ、榎原」

「は、はい。佐原先生」

沙帆子も同じ気持ちだったらしい。

手を繋いだふたりは、そこから一目散に逃げ出した。

2 たつぷりの動揺

車に乗り込んだ啓史は、助手席に座っている沙帆子に目を向けた。

シートベルトを装着しようとしているのだが、なかなか嵌められないでいる。

手伝ってやるうかと思っただが、あたふたしている様が可愛くて、つい知らぬふりをしてしまった。どうか自力で着けたのを見届けた啓史は、満ち足りた気分ですタートさせた。

だが、化粧をして大人びた彼女の顔を見るたびに、どうにも鼓動が速まり……気もそぞろになる。高校二年生の彼女が、一気に啓史の歳まで成長したかのように感じてしまう。

以前参加した合コンのメンバーに、沙帆子のイメージに近い女性がいたが、あの彼女は化粧をしていても、幼い感じがした。

けれど……沙帆子は違う。

「あの、ど、どのくらいで着くんですか？」

緊張を滲ませた表情で、沙帆子は動揺もあらわに聞いてくる。啓史の両親に会うことは、彼女にとつてとんでもなく負担らしい。

両親の反応がどうだろうと、沙帆子が気にすることはないので。それに、沙帆子を気に入らないはずがない。

無意味に緊張している沙帆子に、啓史はいらついた。

「緊張なんか、する必要ないぞ」

「必要とか、必要ないとかじゃないんです」

沙帆子は、啓史の言葉が気に入らなかつたらしく、むっとしたように反論してきた。だがすぐに表情が変わり、今度は泣きそうな顔になる。

継すがるような目を向けられ、落ち着かない。だが、結婚式までもう日がないのだ。また改めて後日などと、悠長なことは言っていられない。

沙帆子に無理を強いようとしていることに罪の意識が湧くが……

「じゃあ、ずっと緊張してる」

思うようにいかないもどかしさから、吐き捨てるように言っしまい、すぐに後悔した。

沙帆子の緊張をやわらげるような、思いやりのある言葉をかけられない自分に、ひどく腹が立つ。

「っ、冷たくないですかあ」

その言葉は、啓史の心をぐざりと刺した。

彼は口元を強張らせた。

「俺の言ったことに反論しといて、他に何言えってんだ？」

「だって……いい、意地悪です……先生」

「先生？」

啓史は棘のある声を上げた。正直、意地悪と言われたのもこたえた。

「す、すみません」

小さくなつて謝まる沙帆子に、ため息をつく。

俺ときたら、どうしてもつとうまい言葉を口にできない！

彼女を緊張させてしまうばかりで……

そんなこと、これっぽっちも望んでいないのに……

「あんまり……緊張されると、連れていけなくなる」

啓史は苛立った口調のまま言った。

「はい？」

ずっと俯いていた沙帆子が、こちらに顔を向けてきたのに気づき、啓史はちらりと彼女を見た。

「だが、先延ばしできるほど、日数の余裕がない」

沙帆子は顔をしかめつつも同意するように頷いてくれたが、啓史は自分の言葉に苦いものを感じていた。

日数に余裕がないと言いながら、彼はまだ両親に結婚のことを伝えていない。しかも今日、沙帆子連れていくことも告げていない。

俺、なんだかんだ言える立場じゃないよな……

なのに、名前を呼ぶよう無理強いしたあげく、緊張している沙帆子を責めるなんて……

啓史、お前ときたら、最低だぞ。

「実を言うと、まだ結婚のこと、知らせてないんだ」

激しく反省した啓史は、前方に目を向けたまま、真実を暴露した。

沙帆子は目を見開き、「ふえ？」と、おかしな声を上げる。

頬のあたりを、じーつと見つめられているようだ。視線を食らっている頬がむずがゆい。

「で、でも。それじゃ、お会いした途端、言うつもりなんですか？」

沙帆子のまっとうな疑問に、顔が歪む。

さすがに顔を合わせた途端、俺、こいつと結婚するから、などと言っては唐突すぎる。

運転しながらちらちらと沙帆子を窺うと、そのたびに沙帆子は表情を変えていた。

少々パニックに陥っているようだ。

「そのへん、俺がうまくやるから……」

伝えていないのは事実だし、簡単にいくとも思っていないが、まあ、すべてはこれからだ。なんとかしてみせるし、けっして彼女に負担はかけない。

「とにかく俺に任せといてくれ」

啓史は決意を込め、きつぱりと告げた。

「あの、せん……コ、コホンコホン」

先生という呼び方を禁止されていることに途中で気づいたようで、沙帆子はわざとらしい咳を立て続けにする。

「佐原……さん？」

啓史が笑いを堪えていると、彼の反応を窺うように呼びかけてきた。

結婚相手に対する呼び名としては、他人行儀すぎるのではと思えたが……いま、これ以上を望むのは酷だろう。

問いかげの答えを待っている沙帆子に、彼は「なんだ？」と聞き返した。

「わたしのこと……つまり、みなさん、まったくご存知ないってことなんですよね？」

「まあ、そうだ」

啓史は気まずく思いながら答えた。

その答えに、沙帆子は眩暈がしたかのように上半身をふらつかせた。沙帆子の大げさな反応に、先ほどの反省もどこかへ吹き飛んでしまう。啓史は苛立ちに任せて口を開いた。

「心配するな。問題はない。電話で告げるのでは、話が中途半端に伝わりやすい。実際、顔を合わせて話したほうがすんなりいくに決まってる」

思いつくまま口にした言葉だが、この考えはあながち間違っていないと思えた。

事が事なのだ。人生を左右するような……

顔を見て話したほうがいい結果を得られるはずだ。

沙帆子は何を考えているのか、そのあとかなり長いこと押し黙っていた。

その沈黙は、啓史にとつてありがたかった。

問題はないと言い切ってしまったが、そんなはずはないと彼自身わかっている。だが、わかっているだけに、そこをつつかれたりしたら、また苛立ちに駆られて怒鳴りつけてしまうだろう。

まったく……自分に疲れてしまう。

「あ、あの、先生。わ……」

「違うだろ」

しばらくして口を開いた沙帆子に、啓史は否定の言葉を返した。

「へっ。は、はい？」

「呼び名。気をつけろよ。もうそこだぞ」

まったく、こいつときたら、学ばないやつだ。この先が不安になる。

「えっ？ 気を……も、もおう？」

「ああ。あの角、右に曲がった先だ」

「どっ、どっ、どっ、どーしようおお！」

その叫びには焦りと恐怖が混じっていたが、啓史は意に介さず、右折した。

もうここまでできたら、いちいち相手をしている暇はない。

「せ、先生。止めて、止めて、いっぺん止めてください。深呼吸して落ち着くからっ」
沙帆子のテンパった様子に、笑いが込み上げる。

「ぼーか」

そっけなく答え、啓史は見慣れた道を進んだ。

深呼吸などしたところで、落ち着けるものか。だいたい実家はすぐそこなのだから、こんなところで車を止めたりしたら顔見知りの人間に遭遇してしまうかもしれない。

たとえば弟の順平とか……

そう思った瞬間、前方からやってきた車に啓史は目を見張った。

あのシルバーの車……たぶん……

「先生、見て、見て、すごい可愛い喫茶店がある」

これまでとは一転、沙帆子の明るい声に、啓史は「えっ？」と声を上げてしまう。

おかしいことを言う。この周辺に、喫茶店などないはず……

啓史はどんどん近づいてくるシルバーの車を気にしながら、沙帆子のほうに目を向けた。沙帆子は啓史に、指をさしているほうを見るように一生懸命促してくる。

その時点で沙帆子が指さしているものに見当がついていた啓史は、半ば脱力しつつ目を上向けた。彼女の発見した可愛いお店つてのは、喫茶店ではなく彼の親の家……

反応に困った啓史は「ああ」とだけ口にし、こちらに気づいて手を上げてきた順平を見て車を止めた。

「どうしたんですか？」

車を止めたことに戸惑ったのだろう、沙帆子が言葉を発した瞬間、順平の視線が彼女に向いた。

まだ運転中だというのに、順平が驚きに固まっている。

こいつ、大丈夫か？

「いや」

順平に気を取られていた啓史は、沙帆子に上の空で返事をした。

考えもなくブレーキを踏み込んだのだろう、順平の車は前後に大きくガクガクツと揺れ、唐突に止まった。

順平は、めいっばい目を見開き、無言で啓史を見つめてくる。何か言いたいようだが、口がきけないらしい。

「お前、ここに停めるんだろ？」

窓を開けた啓史は、弟の反応など構わず、家の駐車場を指さして尋ねた。

「あ……」

固まったまま一声発した順平の目が、再び沙帆子のほうに向けられた。

「ああ……の、つもりだけ……」

喉を締め上げられているかのような声だった。

啓史が女を連れている事実が、受け入れがたいらしい。

「それじゃ、俺、向こうに停めるから」

「あ、ああ」

順平のその返事は、ずいぶんと未練がましく聞こえた。動揺していても、沙帆子が誰だか知りたくてならないのだろう。

啓史は車を移動させ、父親の宗徳むねのりが経営している工場の敷地へと入った。

「いまのひとつて、せ……えー佐原、さ、ささんの……」

「お前な、普通に呼べよ」

啓史は呆れて言った。なのに沙帆子は、啓史の言葉に表情を明るくする。

「えっ。先生って呼んでいいんですか？」

はあっ？

啓史は、沙帆子の額めがけて思わず拳を放った。沙帆子はぎよつとした顔で「ぎゃっ」と叫ぶ。ぶつかる直前でピタッと拳を止めたあと、啓史は沙帆子のおでこに拳をつけ、手加減せずにごういと押した。

「んなわけないだろ！」

「じゃ、じゃあ、どんなわけで？」

どんなわけもへつたくれもあるかと怒鳴りつけてやりたかったが、沙帆子ときたら、いたいけな目をして見つめてくる。

憤りがゆるゆると消えていった。

「佐原さんなんて、呼びづらいだろ？」

「それはもう」

「だから、啓史さんって呼べ」

沙帆子の瞳は、そんなの無理ですと訴えてくる。啓史は凄むように沙帆子を睨みつけた。

「はっ」

怯えた顔で、沙帆子は答えた。

3 半分の安堵

「あの、ここに車停めてよかったですか？」

車から降りた沙帆子は、工場を見回して尋ねてきた。

「ああ。行くぞ」

沙帆子を促し、家に向かう。

母の久美子は家にいるだろうが、父はいるだろうか？ もしかして、工場だろうか？

あのあと順平が母親のところへ飛んでいったのは、火を見るより明らかだ。

今頃は、啓史が女を連れてきたと、夢中で報告しているに違いない。

まあ、自分で言わなくていい分、ある意味、肩の荷が下りたか……

「先生のお宅は、さっきの方が車を停めた家なんですか？」

「そうだ」

沙帆子の問いに、啓史は顔をしかめた。

両親の家を喫茶店だと勘違いした沙帆子だ。あのやたらファンシーな家が、彼の両親の家だとわかつたら……どう思うだろう？

「さっきのひと、先生の弟さんですか？」

「ああ。順平っていう。ちなみに兄貴は徹^{てつ}」

啓史はわざと、兄の名を「てつ」と口にした。

「とおる」と口にしたら、沙帆子は自分の中学のときの担任と同じ名だと、気づくかもしれない。

「あの、わたし……」

沙帆子が口ごもりながら何か言いたそうにしているのを見て、啓史は緊張を感じた。

もしや、啓史の兄が自分の元担任ではないかと疑いを持ったのでは……

兄の徹が、敵になるか味方になるかは、彼にも判断がつかない。

徹は、沙帆子に大きな影響力を持つはずだ。徹に説得されたら、結婚をやめると言い出す可能性だつてある。

やはり、今日のところはできるかぎり、徹と沙帆子を会わせないようにしよう。

沙帆子と結婚するために、彼の前に立ちはだかるものを頭の中で改めて並べてみた啓史は、げんなりした。

自分の両親、兄の徹、さらには沙帆子の父親……

そして、最も憂慮すべきもの……それが沙帆子なのだ。

結婚したい相手が、一番の不安だなんて……最悪だよな。

本来、ふたりが心をひとつにしてこそ、結婚は成立するものなのに……

沙帆子の気持ちを引きちんと確認すべきなのはわかっている。けれどそれをしたら、彼女は結婚などできないと言いつつも出さずかもしれない。

それでも、昨日の沙帆子を思い返すと、不安がやわらぐ。

教会の中を見回して、彼女はとても嬉しそうにしていたし、啓史に手を取られても、嫌がったりしなかった。

だが、彼女の内面は、いまものすごく揺れている。ほんのちよつとでもミスしたら、その揺らぎは彼の望まないほうへと傾くだろう。

「おかしいですか？」

「おかしい？」

考え込んでいたために、彼女が何を言っているかわからず戸惑ったが、沙帆子の仕事で、自分の姿が気になっているのだとわかった。啓史は沙帆子を見つめて口を開いた。

「まあ、完全否定はしないが……」

話題が逸れたことに安堵し、はつきり冗談だとわかる口調で言ったのに、沙帆子はまるまる本気に取ったようだ。落ち着きを失って両手を泳がせたあげく、自分の顔に手のひらを当て途方に暮れた様子で「やっぱり」と言う。

「ど、どこがおかしいんですか？ 顔？ 顔ですか？」
「何を焦ってる。冗談だ」

啓史は呆れながら言った。

こいつ、冗談も通じないくらい緊張してんのか？

「え？ でも、順平さん、わたしのこと見て……」

は……？ 順平……さん？

「おい！」

啓史は声を張り上げた。

「は、はい？」

「お前、なんで順平のことは、すんなり呼んでんだ」

「えっ。名前を呼んじゃ、いけなかつたですか？」

「俺のことは、まともに呼べないくせに」

啓史の顔を見つめて聞いていた沙帆子は、困ったように唇をすぼめる。

「だって……」

ぼそぼそ口にした沙帆子は、急にパッと華やいだ笑みを浮かべた。彼女の視線の先に目を向けた

啓史は、笑みの理由を知り、顔を歪める。

「先生、見てほら、やっぱり可愛い」

沙帆子は啓史の袖を引つ張りながら、両親の家を指さす。

「お庭も素敵。見て見て、小人さんがいるし、くまとか、ほらっ、うさぎさんも」

小人さんに、くまさんに、うさぎさん……ず、頭痛がする……

それにしても、俺との会話を放棄して、くまだうさぎだと興奮しているとは……

「そんなに気に入ったなら、もらって帰れ！」

プチ切れた啓史は、庭に転がっている置物を蹴って回りたいたい衝動に駆られ、声を荒らげた。

「何言ってるんですかぁ。お店のもの勝手に取れませんよ」

「ここは、店じゃなく」

啓史の言葉に、沙帆子はきよんとした。

「はい？ ここ、お店じゃないんですか？」

「ああ。俺の両親の家」

いたずらに間をあけると、言い出せなくなりそうだったので、啓史は即座に返事をした。だが、口にしたあとで、頬が引きつる。沙帆子があまりにも驚いているせいだ。

「はいーいーい？」

たっぷりと驚いたあと、沙帆子は声を裏返らせて叫んだ。

啓史は、この位置からは見えない玄関に視線を向けた。すでに順平の声が微かに聞こえてきている。

我が弟は、母親に報告の真っ最中のようだ。

「せ、先生。これは何かの間違いじゃ」

門を抜け、玄関に向けて歩き出していた啓史に、沙帆子が焦ったように飛びついてきた。

「お前な、自分の家、間違えるわけないだろう」

啓史の指摘に、沙帆子は気まずそうな顔を向けてくる。

「で、でも……似合っていないっていうか」

啓史は眉をひそめた。

「似合っていない？」

「何が？」

「え、えーとですわね」

「だから、ほんただって。もうきつと来るよ。ぼ、僕、見たんだからさ」

ひととき大きな順平の声が聞こえた。

その声に沙帆子が玄関のほうを向く。啓史も顔を向けた。

少し開いたドアの隙間から順平が見える。

「順ちゃん、前にもそれと同じようなネタでわたしをからかって、大笑いしてたわよねえ」

「だからさあ、これは騙しじやないって、もうわっかんないなあ。あれだって、もう二年以上も前の話だし……」

「ふん。啓史さんはね、飯沢君を連れてくるって言ったのよ」

啓史は母親の言葉に、思わず眉を上げた。

飯沢を連れてくる？」

お袋のやつ、あの会話で、勝手にそう思い込んだのだろうか？

顔をしかめっていると、問うような顔で沙帆子が見つめてくるのに気づいた。

啓史は彼女に向き直り、母の言葉を否定して首を横に振ってみせた。

「兄貴、ほんつとに、飯沢さん連れてくるって言ったの？」

「言ったわよ」

ため息を吐くと、啓史は「言ってるねえって」と吹きながら、大股で玄関に近づいていった。ドアノブを掴み、勢いよく開ける。

「うわっ」

ドアにもたれていたらしく、順平が悲鳴を上げながら転がり出てきた。

啓史はさっと避けて順平の転ぶ様を期待したが、順平はなんとか体勢を立て直してしまふ。

残念。順平のやつ、案外しぶとい。

啓史は玄関の上がり口にいる母に顔を向けた。

「飯沢を連れてくるなんて、俺、言った覚えないけど」

「あ、あら、啓史さん。お帰りなさい。ふふ、順ちゃんがわたしのこと騙すから、ついね」

久美子は悪びれた風もなく、きゃぴきゃぴと笑いながら答える。

「だから、騙してなんかいないって」

母のほうに振り返りざま、順平は怒鳴るように言った。

嘘は言っていないのだから、順平の苛立ちは当然だろう。

母はまだ沙帆子の存在に気づいていない。母のいる位置からでは、啓史の後ろにいる沙帆子の姿

は見えないらしい。

「それで、啓史さん、どなたをお連れしたの？ お昼はお任せでいいってことだったけど、イタリアンでいいのかしら？」

「昼飯はなんでもいい」

そんなことより、沙帆子の紹介だ。後ろを振り向き、沙帆子を母の前へと押し出した。母と沙帆子が目を合わせたのを確認し、口を開く。

「紹介するよ。榎原沙帆子。俺の彼女」

「ほ、ほら、ほらあゝ」

順平は興奮した様子で、どうだ見てみると言わんばかりに、母親に向かって喚く。

久美子のほうは、完全に目が点になっていた。

「か、かの……彼女って、彼女？」

母親の驚きが秒単位で膨れ上がっていくのが手に取るようにわかる。

「あの、はじめまして」

沙帆子のほうも、かなり緊張した面持ちで、久美子に頭を下げている。

「あ……ええっと」

久美子は、挨拶を返すこともできないほど動揺しているようだ。ここは彼が場を仕切ったほうがいいだろう。

「上がっていいかな？」

「あい。はい。上がる？ 彼女？ 彼女？ 啓史さんの？」

啓史はため息をついた。さすがに、これじゃテンパリすぎだ。

そんな母と比べてしまうせいかわ、沙帆子がずいぶんと落ち着いて見える。

「母さん、落ち着けよ。沙帆子が困るだろ」

「さ、沙帆子？ ……さん」

すでに紹介したあとだというのに、いまはじめて聞いたというように、久美子は沙帆子の名を口にした。

啓史はさじを投げた。駄目だな、こりゃ……

「まあ。まあ、まあ」

「母さん」

延々と「まあ、まあ」と繰り返すような母を正気に戻そうと、啓史は強く呼びかけた。

「あ」の形に開けられた口を、久美子はぼくと閉じ、胸に両手を当てて長い息を吐く。

「ごめんなさい。でも……驚くでしょう？ 突然すぎるわよ、啓史さん」

責めるように言われた言葉を、啓史はスルーした。

「とにかく、上がらせてもらおうよ」

啓史はスリッパを取り、沙帆子と自分の前に置いた。

「ありがとうございます……啓史さん」

沙帆子の口から出た自分の名に、啓史はドキリとした。

そう呼べと指示したのは自分なのに……

沙帆子にすれば理不尽な感情だろうが、ドキリとさせられたことに、むしろくしゃしてくる。啓史がそんな感情を抱いていることなど知らない沙帆子は、なにやら期待するような笑みを向けてきた。その笑みに余裕が見える。

啓史は眉をひそめた。

こいつ、さっきまでの緊張はどうしたんだ？

「ああ」

啓史は複雑な気分で見事返しをし、家上がった。沙帆子も続いて上がってくる。

「親父は？」

「書齋で本を読んできると思うけど……」

「そう」

久美子は彼らの後ろにいる順平に視線を向けた。

「パパ、呼んできて、順ちゃん」

「おー」

母親の言葉を待っていたのだろう、勢いよく返事をしながら上がり込んだ順平は、父親の書齋に向かつてバタバタと走っていく。

順平はこの出来事を父に報告できるのが嬉しくてならないようだ。

啓史は気が重くなった。

父親は、とても尊敬できるひとだ。わからず屋でもない。話せばわかってくれるひとだと思う。それでも、事はそんなに簡単ではないだろう。

納得させられるだろうか？ 父は、やはり大きな壁になりそうだ。そして、もうひとつの大きな壁となるだろう兄の徹……聞いていたとおり不在のようで、まずはほっとした。

とにかく、父親の説得からだ。

4 膨らんだ人生

「わあっ、素敵です」

窓から外の景色を見て、沙帆子は感嘆した声を上げた。

彼が思っていたとおり、この家や庭は、彼女の好みだったようだ。

この家に愛着を感じれば、彼の両親とも打ち解けやすいかもしれない。

「喫茶店じゃなかったけどな」

安堵した啓史は、沙帆子をかからなかった。

「わざわざ言わなくても」

拗ねた目をして文句を言う沙帆子が無性におかしくて、啓史は吹き出した。

「あのおー」

気後れしているような声に振り返ると、この家の住人である久美子が、所在なさそうに立っている。そんな母に、啓史はおかしさを感じながらも、ひどく申し訳なくなった。

「母さん、お茶でも用意したら？ 落ち着くんじゃないか？」

「そ、そうね。そうよ」

久美子は急に張り切ったような声を出し、キッチンに入っていく。

「なんだかずいぶん驚かせちゃったみたいですね」

沙帆子の言葉に頷きつつ、啓史は口を開いた。

「予想してなかったことだろうからな」

沙帆子が楽しそうな笑みを浮かべてくれ、啓史はほっとした。

彼女のほうは、もう緊張していないように見える。

「お母様には申し訳ないんですけど、おかげでわたしのぶんの緊張、かなりほぐれました」

啓史は笑いを堪えた。

そういうものなのかもしれない。……ならば、ここは母におおいに感謝しなくてはならないか？

「そうか。よかったじゃないか」

啓史は沙帆子にソファに座るように身振りで促し、その隣に自分も座り込んだ。

「ずいぶん、可愛らしいお宅ですね」

ゆっくりと部屋を見回しながら沙帆子が言う。

啓史はすでに見慣れた室内を改めて見た。可愛すぎて啓史は落ち着かない。この家で落ち着ける

のは、父の書斎くらいのものだ。

「お袋の趣味。親父が夢を叶えてやったってどこ」

沙帆子は、感激したような表情になった。

「素敵ですね」

ずいぶんとうらやましそうな声だ。

まさかこいつも、こんな家に住みたいってのか？

確かに好きそうだよな……

こんな家を建ててやったら……どんなにか……

啓史は、真剣に考え出している自分に気づき、慌ててその考えを投げ捨てた。

いやいや、ないぞ。何を馬鹿なことを……

こんなファンシーな家で自分が暮らすなんて……か、考えただけで胸焼けしそうだ。

家はシンプルなのが一番落ち着ける。だよな？ 自分に確認し、自分で頷く。

「先生の弟さんは、ここで一緒に住んでるんですよね？」

「ここは両親だけの家なんだ」

「そうなんですか？」

「二世帯住宅みたいなのに、奥のほうで元の家にくつついてる」

一瞬考え込んだ沙帆子が、理解を見せて頷いた。

「弟さんが車を停めた家ですね」

「ああ」

あそこには、お前の元担任も住んでいるんだぞと、胸の中で付け加えてしまう。その事実は、彼女をどれほど驚かせるだろうか？

徹に知られるより先に、沙帆子に真実を告げなければ……

口にしづらいが、言わないわけにはいかないのだ。

だが、そうなれば、啓史が以前から彼女のことを知っていたと知られてしまう。

その頃からずっと自分のことを好きだったのかと、こいつに思われてしまうんじゃないか？

……いや、実際そうなわけで……

啓史は顔を歪めた。

くそっ！ 考えただけで、プライドが……軋む……

ダイニングのドアが静かに開き、父が姿を見せた。

啓史は宗徳と視線を合わせ、軽く頷いてみせる。

「いらっしやい」

宗徳がやってきたことにまるで気づいていなかったらしい沙帆子は、父の呼びかけにぎよっと振り返り、飛び上がるように立ち上がって頭を下げた。

「おじやましています。榎原沙帆子と申します」

「啓史の父の宗徳です。どうぞ座って」

宗徳の言葉が耳に入っていないのか、沙帆子は立ちすくんだまま動きを見せない。

せっかくリラックスしていたというのに、父の登場で、また緊張してしまったらしい。

「沙帆子、座れば」

啓史が声をかけると、沙帆子は焦ったように腰かけた。

身体を強張らせているのがわかる。緊張を取り除いてやれるものなら、そうしてやりたかった。

宗徳は、ふたりの向かいに座ると、啓史に向かって仕事の話をはじめた。どうやら、緊張している

沙帆子を思いやつのことらしい。

仕事の話など沙帆子には退屈かもしれないが、宗徳と面と向かって会話するよりは気が楽だろう。

話の途中で、久美子が飲み物を持ってやってきた。皆にカップを配り終えた母は、最後に「啓史

さん、はい」と言葉を添えながら、彼の前に灰皿を置く。当たり前のように出された灰皿を見つめ、

啓史は思わず固まった。

そうだった、俺が煙草をやめたことを、まだ家族は知らないんだった。

「外で吸ってね」

啓史は居心地が悪くなり、上半身を動かす。

どう答えるべきか……

沙帆子を窺うと、問うような目をしている。

気まずい気分で顔をしかめ、啓史は口を開いた。

「やめたんだ」

ぼそりと告げた言葉に、母は「えっ？」と派手に叫び、父のほうも、はつきりと驚きを見せている。

ふたりの大袈裟な反応に、啓史はイラついた。母だけならばともかく、普段、どんなことにも動じない父まで……

「な、なんて？」

ちゃんとわかっているはずなのに聞き返してくる母に、啓史はくさった。

「だから、やめたんだ」

思わず語気が荒くなる。

「やめた？ やめたの？ほんとに？」

何度も確認されて、ムカツキが増す。

「ああ」

吐き捨てるように返事をしながら、啓史はカップを手に取り、みな視線を避けてコーヒーを飲んだ。

「絶対やめないって、あれほど吼えてたのに？」

母親の表現に、むっときた。

「吼えて？」

「こ、言葉のあやよ、啓史さん、あや」

啓史は内心舌打ちした。ここまで過剰に反応されるとは……。確かに、やめるやめるとしつこく言われ、意固地になって禁煙しないと言い続けていたのだから、この母の反応も当然か？

沙帆子の前で、禁煙のことを話題にしたくなかったのに……

電話をしたついでに、禁煙したと、一言口にしておけばよかった。そしたら、こんな反応をされることもなかっただろう。

「やめたらつてうるさく言ってた。やめたんだから、いいだろ、それで」

早いところ、この話題を打ち切りたくてならないのに、久美子は終わらせるつもりはないようだ。

さらに言葉を向けてくる。

「でも、な、なんで？ どうしてやめられたの？」

一番触れてほしくなかったところをつかれて、啓史はぐっと詰まった。

「もういいだろ！」

苛立ちに駆られ、思わず母にきつい言葉を投げつける。

「啓史！」

父から鋭く名を呼ばれた。確かにきつく言いすぎたかもしれないが、だからといってこのことについてこれ以上とやかく言われたくない。

「どうでもいいだろ。……理由なんて」

俯き、顔を強張らせて言うと、父が「そうだな」と同意してきた。なんとなく同情されているように感じられて、むしろくしゃりするし気まずいしで、顔が上げられない。

「煙草は、平気かな？」

テーブルの上のカップを睨みつけていた啓史は、宗徳の言葉にハツとして顔を上げた。

父の視線は沙帆子に向けられている。

啓史は口元を強張らせた。親父ときたら、最悪だ……

「え？ わたし？ 煙草ですか？」

戸惑ったように沙帆子は聞き返す。

沙帆子は、啓史の禁煙に、自分が絡んでいるなんて思ってもいないのに……

「父さん！」

焦って大声を上げた啓史を見て、父が吹き出す。

自分の顔が赤らんできているのがわかる。

「啓史さん、も、もしかして、この方のためにやめた……とか？」

ストレートな問いかけに、啓史は喉を絞められたように息が詰まった。吐き気すらしてくる。

「そうらしいな」

驚いている母、そしてものすごく愉快がっている父……

「最悪」

持っつていき場のない憤りいきどおを胸に、啓史はぼそりと呟いた。

うまくやれない自分に、啓史はムカついてならなかった。

自分を過信しすぎていたのかもしれない。

あんなにも冷静さを欠くとは……まったく、俺ときたら、馬鹿じゃないのか。

しかし、煙草をやめたことが、あんな風に話題になるとは……すでに煙草のことなど、まったく

く頭になかっただけに苛立つてならない。

彼が煙草をやめたのは、沙帆子が煙草の煙を苦手だと知ったからだ。あのときは、煙草をやめなければ、沙帆子を手に入れられないんじゃないかという強迫観念に囚とらわれて……

ただでさえ、そんな自分に苛つくつてのに……沙帆子に知られるなんて、マジ最悪だ。

啓史は、キッチンにいる沙帆子に視線を向けた。いま彼女は、昼食を作る母を手伝ってくれている。

ふいに彼女が目を向けてきて、ふたりの視線が合った。沙帆子は焦ったように視線を逸そらしてしままう。

目を逸らされたことは面白くなかったが、沙帆子が母と話しているのを見てほっとした。互いに遠慮はあるようだが、雰囲気は悪くないようだ。

さっきは、手伝いを申し出た沙帆子に対して、母が微妙な返事をしたことに苛立つてしまい、つい怒鳴ってしまった。反省しているが……啓史の両親は、沙帆子にすれば赤の他人なのだ。ちよっとした反応や言葉が、彼女を傷つけるかもしれない。この家で沙帆子が傷ついたりしないように、彼女を気遣い、守るのは啓史の役目だ。

もちろん、父も母も悪い人間じゃない。故意に沙帆子を傷つけたりはしないとわかっている。

「そう、心配するな」

小声で話しかけてきた父に、啓史は顔を向けた。

なんと返せばいいのかわからない。啓史は黙って父を見つめた。父も何も言わずに見つめ返してくる。

いましてたエプロンで涙を拭いていた母の姿が蘇り、啓史は気まじくなくなった。母は困ったように、「突然で……どうしていいのか頭が回らない」と口にしていた。「母さんの気持ちを汲め」と、父からも戒められた。

俺が悪いんだよな、どう考えても……

「悪かったよ。その……色々……」

啓史は父親から視線を逸らし、ぼそぼそとした声で謝罪した。

「まあ、よかった。ところで、さっきの話だが……」

宗徳はあっさりとした仕事の話に戻る。もちろんそれは、啓史にとってありがたかった。

「ちよっと工場のほうでデータを見てくれないか」

宗徳に言われ、啓史はためらった。沙帆子をひとり家においていても大丈夫だろうか？

「ふたりにするのは、悪くないと思うぞ」

父はそう言うが、すぐには頷けない。

「そう……かな」

「ああ。私らがここにいないほうが仲良くなれる。いい関係を築いてほしいだろ？」

そう言われてしまうと反対もできず、啓史は宗徳に促されるまま、腰を上げた。

「久美子、少しばかり工場に行つてくる。すぐ戻る」

「あっ、はい」

そう返事をする母に、戸惑いはない。沙帆子のほうも心細い様子はなかった。

すぐに戻つてくれれば、大丈夫だろう。

「どうだ？」

工場でパソコンと向き合っていた啓史は、父に問われて顔を上げた。

「ああ。俺もこれでいいと思うよ。あとは、気長に経過を見て……結論を出すのはそれからいいと思う」

パソコンを終了させながら、啓史は言葉を続けた。

「その間に、他にもっといいアイデアが浮かぶかもしれないし……」

「わかった」

仕事の話をしているうちに、いつもの自分に戻った。というか、沙帆子が両親の家にいるということが現実味を失ってきていた。

沙帆子、いま、あの家にいるんだよな？

もちろんそうだ。俺が連れてきたんだから、いるに決まってる。

彼女ひとり母のところを置いてきてしまったが……今日の母は普段と違う。何か沙帆子を傷つけるようなことを口にしていないだろうか？

「そう、気にすることはあるまい」

考え込んでいた啓史は、顔を上げて父を見た。

「なにを？」

もちろん、沙帆子のことを言っているのだとわかっていたが、素直に認められない。宗徳は、啓史の様子を窺うように視線を向けてくるばかりで何も言わない。

胸がむずがゆくなる。

「父さん」

「想いが届いたということか？」

啓史は一瞬息を止めた。

「……なんのことだい？」

椅子の背にもたれ、啓史はわざとそっけなく答えた。

「ここ数ヶ月のお前は……ひどかった」

思いあたるところがある言葉に、口元が歪む。

「俺は……その……」

「突然すぎて驚かされたが……まあ、お前らしいといえば、お前らしいやり方だな」

「……ごめん」

複雑な気分で、啓史は謝った。

「父さんや母さん、徹兄や順平にも……心配をかけた続けたことは、申し訳なかったと思ってる」

「うむ。……それじゃそろそろ帰るか？」

「ああ」

啓史が立ち上がったとき、父の携帯が鳴り出した。どうやら母からで、昼飯の支度ができたとい

う連絡だったようだ。

母の手料理はひさしぶりだ。母親の甘い味付けを思い出し、微妙に顔が引きつる。

沙帆子は大丈夫だろうか？ 甘いものが好きだから、甘すぎて、美味しく食べられるだろうか。だといののだが……

「啓史」

ドアを開けて振り返った父は、なんともいえない笑みを啓史に向けてきた。

「うん？」

「人生が、とてつもなく膨らんだらう？」

啓史は面食らった。

だが、その言葉が、胸の中にじわじわと浸透していく。

研究ばかりに熱中してきた。研究一筋で人生を終えると思っていた……なのに……

ちよっとしたきつかけで沙帆子が彼の人生に飛び込んできて、彼の心に強固に住み着いた。そして……考えてもいなかった仕事に就いている。

人生はわからないものだ。

研究だけの人生だつて楽しかった。みなで悩んだり、解決の糸口を見つけ出したり……彼に充分なやりがいと満足を与えてくれていた。

それでも、螺旋のように同じことを繰り返しているような気もして……

沙帆子の存在は、これまで彼が知ることのなかった多種多様な感情を、彼に味わわせる。

そして、それはこれからも……

「そうだな」

啓史は短く答え、切なさや苦味を感じながら笑みを浮かべた。

5 越えるべき壁

家に戻った啓史は、何気ない素振りで沙帆子と母の様子を窺った。

何か答えづらい質問をされて、困ったりしなかつただろうか？

傷ついたり？

啓史と目が合った沙帆子は、何か言いたげな視線を向けてくる。

啓史はすぐに何があつたか聞いてみたかつたが、両親がいる場で聞くわけにもいかない。もどかしい思いを抱えながら、啓史は父と沙帆子が食卓についたのを見て、彼女の隣に腰かけた。

「順ちゃんがいらないんだけど、そのあたりで見なかつた？」

受話器を持った久美子が啓史に問いかけてきた。

「いや」

そういえば、父を呼びに行ったきり、ずっと順平の姿がない。沙帆子がいるから、恥ずかしくて母屋に引っ込んでいるのだろうか？

「出かけるとは言っていないんだろう？ 向こうの家にいるんじゃないのか？」

宗徳の言葉に、久美子は首を横に振る。

「携帯は鳴るんだけど……出ないのよ。おつかしいわねえ。順ちゃん、黙って出かけたらしらないんだけど……ちよつと見てこようかしら」

母の言葉を聞いているうちに、ある疑惑が浮かんできた。順平のやつ、まさか……？

「俺が見てくるよ」

そう言つて啓史はすぐに部屋を出た。

母屋の玄関まで急ぎ、駐車場を確かめた啓史は顔をしかめた。

駐車場は空、シルバーの車はない。

あいつ……まさかと思つたが、やつぱりか……？

怒りと後悔が胸に湧き上がった。

順平は、兄の徹にチクリに行つたに違いない。

あんの野郎！ あとで思い知らせてやる！

そう胸の内では叫んだものの、いまとなつては何もかも後の祭りだ。

俺ときたら、どうして順平の首根っこを押さえておかなかつたんだ？ あいつがこういう行動に出ることは、予想がついたはずなのに……

これで、沙帆子と徹は顔を合わせてしまうことになる。一番避けたかつた事態になるわけだ。

苛立ちと落ち着かない気分を抱え、啓史は皆が待つダイニングに戻つた。

「いない。出かけてる」

ぶっきらぼうに報告し、再び沙帆子の隣に座った。

すぐに食事が始まったが、しばらくの間、姿を消した順平の話題が続いた。平静を装っていたものの、腹立ちは増すばかりで、食事どころではない。

徹が戻ってくれば、沙帆子の正体は即座にバレる。

沙帆子もまた仰天するだろう。

部活を優先して戻らないでくれればいいが……順平が沙帆子の名を正確に記憶していて、徹に告げてしまったら、徹は何を置いても飛んで帰ってくるに違いない。

順平の記憶力次第かよ？

くそっ！

啓史は苛立ちを秘めたまま、母親の甘味の強いスパゲティを頬張り続けた。

さっさと飯を終えて、両親から離れる必要がある。そして、沙帆子に徹のことを伝えなければ。

徹とは、両親のいない場で対決したほうがいい。

それとも、いまこの場で、二週間後に結婚することを告げてしまうか？

けど、お袋……息の根が止まるかもな……

だが、どのみち話すんだし……ならばいまのほうが……

チャンスを探り、何度か話を切り出そうとしてみたが、想像以上に難しく、実行できない。

皆の会話に混ざりながらも、じりじりしているうちに、食事は終わってしまった。

沙帆子がフォークを置いて紅茶を飲み終えたのを確認した啓史は、用意していた言葉を口にした。

「沙帆子、奥の家……見たいだろ？」

彼女は啓史の提案に、飛びつくように頷いてきた。

啓史は眉をひそめた。

この反応は？ やはり、啓史のいない間に何かあったのか？

母は、沙帆子にいったい何を……？

「ね、夕食は食べていけないの？」

立ち上がりかけていた啓史は、母に聞かれて顔を向けた。

「いや、三時くらいには帰る。予定があるから」

「あら、残念ねえ。三時くらいには、徹ちゃんも戻ってくるのに」

「徹兄には、また次の機会に会わせるよ」

予定どおり、そうなってくれればいいのだが……

こうしている間にも、徹が戻ってくるかもしれない。

啓史は落ち着きなく立ち上がった。

「それじゃ、行こう」

沙帆子を促し、ダイニングを出る。

ふたりきりになった啓史は、危険エリアを無事脱出した気分が安堵した。

徹は戻ってきたら、なによりもまず、啓史が連れてきた女が本当に沙帆子か、確かめようとする

だろう。

「順平さん、いるみたいですね」

母屋の階段を急いで上っていた啓史は、沙帆子にそう言われ、足を止めて振り返った。

「いや、いない」

「でも、靴が」

啓史と同じ位置まで上がってきながら、沙帆子が言う。

「あいつは、いつでも数足、転がしたままにしてるんだ」

啓史は踊り場まで上がり、窓を指さしてみせた。

「その窓から駐車場が見える。あいつの車はない」

踊り場まで上ってきた沙帆子は、窓から外を覗き、納得したように頷く。

「どこに行っちゃったんでしょね」

「たぶん……」

「たぶん？」

鸚鵡返しにされた啓史は、苦い顔で唇を噛んだ。

俺の兄が、自分の元担任だなんて……聞いたら、こいつ腰を抜かすかもな。

「どうしたんですか？」

戸惑ったように聞かれ、啓史は沙帆子の腕を掴んだ。

「部屋に行こう」

こんなところでは話せない。

彼は強引に、彼女を自分の部屋へと連れていった。

沙帆子はゆっくりと部屋を眺め回す。

「先生、こっちでも暮らしてるんですね」

一通り部屋を見回したあと、沙帆子が言った。

「最低、月一くらいは、泊まりに来てる」

本棚に視線を向けている沙帆子を見ながら言葉返した啓史は、徹のことをどう話そうかと考え込んだ。

「いつ、あのマンションに引っ越したんですか？」

「四月」

「去年の？」

「ああ」

問われるまま答えていた啓史は、先ほど沙帆子がおかしいと言ったことを思い出した。

「佐原先生、あの……」

「お前……」

ふたり同時に口にし、互いに黙る。啓史は沙帆子が出すのを待ったが、彼女のほうも啓史の言葉を待っているようだ。結局啓史は、自分から口を開いた。

「なにか、嫌な思いとかしなかったか？」

「はい？ どうしてですか？」

沙帆子から、きよんとした顔で問い返され、啓史は言葉を足した。

「いや、親父とお袋に言われたことで、傷ついたりとか、嫌な思いとかしなかったか？」

沙帆子は驚いた顔でふるふるとう首を振る。

「全然です」

「そうか？ 俺に遠慮してとかじゃなくて？」

「はい」

力強い頷きに、啓史は少しほっとした。啓史を安心させようとして無理をしているという感じではない。どうやら信じてよさそうだ。

「俺は、自分の両親だからな。親のこと、悪い人間じゃないと思ってる。けど、お前にしてみれば、赤の他人だからな。これから何かあったら、遠慮やら我慢なんてせずに、なんでも俺に言うんだぞ」

この先、沙帆子ひとりで悩んだり、辛い思いを抱えたりしてほしくない。

「は、はい」

「絶対だからな」

啓史は沙帆子の瞳を覗き込み、約束を取り付けるように言った。沙帆子はまっすぐに見つめ返し、「はい」と答える。

啓史はその答えに満足して、「よし」と口にし、ベッドに腰を下ろした。

沙帆子にも隣に座るよう促したが、彼女はためらっている。

啓史は眉を寄せた。

俺が何かするのではと考えているのか？

むっとして、何もしやしないぞ、と言いつつになつたが、本当のところ、何もしないわけがない。だが、まずは徹の話をするつもりでいたのだ。なのに、こんな反応をされては、彼の捻くれた部分に刺激されてしまう。

「榎原？」

沙帆子に向けて命じるように鋭い声で呼びかける。

「えっ、えっとお」

沙帆子が後ずさったのを見て、啓史は素早く動いた。彼女をベッドに転がし、覆いかぶさる。

密着したふたりの身体に、啓史の鼓動が速まった。

「せ、せんせ……」

唇を軽く合わせ、沙帆子の瞳を覗き込む。

あんな反応しなげりゃ、俺は普通に会話してたつてのに……

俺をこういう行動に至らせたのは自分だなんて、こいつ、思いもしないんだろうな。

徹の話をしなければという気持ちはあるのに、この状況を楽しみたいという欲望、沙帆子を味わいたいという欲望を止められない。

「嫌か？」

そう問いかけた啓史は、答えを得る前にまた唇を合わせた。